

事例1
社会へのパスポート
「志」

毎年2万人の高校生と交流
成長への「きっかけ」を提供

高校時代は将来と向き合う大切な時期だが、保護者や教師以外の大人とかかわる機会は意外と少ない。外の世界の大人とのちよつとした出会いから、将来を具体的にイメージしたり、目の前に広がる可能性に気付いたり、一步を踏み出す「きっかけ」が生まれるのではないかと――。

そんな思いがNPO法人カタリバの出発点となっている。2001年、当時大学生だった代表理事の今村久美氏と共同創設者の竹野優花氏の2人は、大学生を中心としたボランティアスタッフが高校を訪問して

大学生との「カタリ場」を通し、 一步踏み出す意欲を引き出す

大学生のボランティアスタッフが高校を訪れ、生徒と本音で語り合うプログラム「カタリ場」を実践を通し、外の世界にいる「先輩」との出会いから、生徒が自分と向き合い、将来へのイメージを膨らませていく姿を追う。

生徒と語り合う授業プログラム「カタリ場」の活動を始めた。生徒の意識改革に及ぼす効果が注目されたほか、07年度からの3年間、東京都教育庁地域教育支援部の教育支援コーディネーター事業において業務委託契約をしたことで高校での実施が増え、現在は首都圏を中心に年間約80校、2万人の高校生とかかわりを持つ。

「キャスト」と呼ばれる登録スタッフは大学生を中心に専門学校生や社会人など約4千人。プログラムごとにキャストがプロジェクトチームを構成して高校を訪問する。キャストは、最初に事務局で基本的な研修を受けた後は、プログラムを通じた実務経験でスキルを高めていく。

カタリバでは、キャストと高校生とのかわりを「ナナメの関係」と呼ぶ。教師と生徒のように「タテ」ではなく、友人同士のように「ヨコ」でもない。学校外の先輩との「ナナメ」だからこそ、本音を語り、本当の自分と向き合うきっかけになると考えている。

高校生とキャストは年齢が近く、価値観も重なるところが多いため、「数年先の自分」をイメージしやすいうえにお手本にもなりやすい。「自分もこうなりたい」という「憧れ」の気持ちが生まれれば、生徒の成長を促す大きなきっかけとなる。生徒から共感を得られるように、キャストもありのままの自分を表現するよう心掛けている。

「カタリバ」という授業

—社会起業家と学生が生み出す“つながりづくり”の場としくみ—

著者◎上阪 徹 発行◎英治出版
話し手◎今村久美、竹野優花、
NPO法人カタリバ



カタリバの立ち上げから、「カタリ場」の活動を通して社会の課題と向き合い、解決していくとする様子が紹介されている。

特定非営利活動法人 NPO カタリバ

◎2006年にNPO法人格を取得。高校生や大学生に向けた独自のキャリア教育プログラム「カタリ場」などを運営。大学生を中心に延べ約4,000人のスタッフを擁する。09年、内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞。

住所 〒166-0003
東京都杉並区高円寺南 3-66-3
高円寺 commons 203

電話 03-5327-5667

Webサイト <http://www.katariba.net/>



チェッキングの場面。身近な話題や関心事などからキャストが「高校生の今」を掘り起こす。高校生にとっては自分を見つめ直す機会となる

高校の実態に合わせて プログラムをつくり込む

カタリ場を通して、キャストと高校生の間にはどのような関係が生まれるのか。10年12月、東京都立桜町高校の2年生約230人を対象に実施したカタリ場の様子を紹介する。

カタリ場の成否を大きく左右するのが、教師へのヒアリングや生徒へのアンケートを通じた事前の実態把握だ。プログラムは共通ではなく、実施学年や時期、生徒の様子や課題、

教師が生徒に期待する変化などを基に高校ごとにつくり込む。

同校は、約65%の生徒が現役で大学・短大に進学する男女共学の普通科高校。進路指導部主任の鳥居純子

先生は、「本校の生徒は、自分はこの程度なのだとはじめから諦めているところがあり、頑張っって伸びていこうとする意欲に乏しい」と話す。

カタリ場は毎年2学年で実施し、今年度で4回目。大学進学や受験勉強を身近に感じさせることで、生徒の気持ちの向かう方向を変えたいという思いから、進路学習の一環として実施している「卒業生による進路トーク」などに加え、カタリバのプログラムを組み込んだ。キャストとの語り合いを通して生徒の心にス

イッチが入り、「自分もやれば出来る」という前向きな気持ちにつながれば、というのが教師たちの願いだ。こうした実態を踏まえ、カタリバが提案した今年度のテーマは、一人ひとりが「自分の強み」を考えること。等身大の自分を見つめ直し、自分の良さを受け入れることが前向きな姿勢につながると考えた。

当日は、約60人のキャストが事前

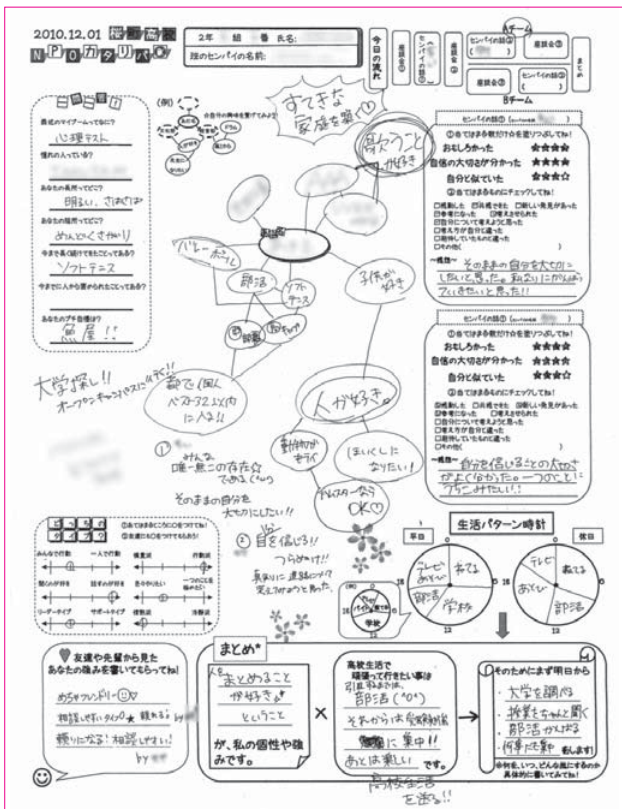
に集まり「シミュレーション」と呼ばれる練習会を実施。生徒の実態、プログラムの狙いや進行などを共有し、キャスト役・生徒役に分かれてシミュレーションを行った。

約2時間のプログラムは、大きく分けて、「チェックキング(座談会)」「サンプリング(先輩の話を聞く)」「約束」の流れで進行する。入場時から生徒の心に寄り添う演出は始まっており、会場の体育館には高校生に人気の音楽がかけられている。キャストは体育館に散らばり、入ってくる

生徒に「こんにちは!」「どこのクラス?」などと話し掛け、そのまま会話につなげながら、あつという間にキャスト1人に対し4〜6人の生徒のグループをつくっていく。

プロジェクトリーダーが全体に流れを説明した後、チェックキング(上写真)が始まった。グループごとに床に座り、キャストが自己紹介をした後、好きな音楽や趣味、部活など身近な話題から一人ひとりの興味・関心を探っていく時間だ。並行して、生徒は「ワークシート」(図1)の

図1 自分を探る「ワークシート」



ワークシートは企画ごとに内容が異なる。アイデアマップで自分の興味を広げたり、性格や生活パターンを分析しながら、グループで対話をする

質問に沿って、自分の興味の広がりや、長所・短所、憧れの人、今まで長く続けてきたこと、人から褒められたことなど、「自分の強み」を探る手掛かりを記入していく。その間、キャストは意識的に身を乗り出したリ、寝そべったりしてリラックスした雰囲気を出し、生徒から話を引き出した。

失敗を隠さず伝える先輩の話から自分を見つめ直す

続くサンプリング(下写真)では、7人のキャストが高校時代の悩みや関心事、現在の目標や大切にしている価値観などを15分ほどでスピーチ。生徒は一旦グループを離れ、興味のあがるキャストを1人選んで話を聞く。「自分に自信がなく、2度も引きこもりを経験したが、人間関係を大切にすることを心掛けたら前向きな性格になれた」

「何をするのもダルくて高校も辞めてしまったが、農業を営む年配の方の話を聞いて、目の前のことに真剣に取り組むようになった」

過去の失敗や悩みをストレートに

伝えるキャストの体験談に真剣な表情で聞き入る生徒が少なくない。スピーチはスケッチブックを使った紙芝居形式で、面白おかしく話すキャストも多く、生徒たちは話に引き込まれ、会場のあちこちで笑い声が出る。

続いて2回目のチェックキングとサンプリングに入る。1回目と異なるのは、グループを二つに分け交代でチェックキングとサンプリングを行う点だ。人数を減らすことで生徒が本音で語りやすくなる、別のキャストの経験談も参考にして、考えるためのサンプルを増やす、といった狙いがある。

グループはキャスト1人に対し生徒2、3人となり、より親密な雰囲気になった。この頃には生徒もずいぶんリラックスし、「自分が何をしたいのかが分からない」「欠点ばかりで自分に自信がない」など、ポツリポツリと本音を漏らすようになる。それに対しキャストは、答えを示さない。「その欠点が逆に良さとして表れる部分はない？」など、あくまでも考えるきっかけを与えることに徹する。



「スイッチ」を入れるために「ナナメ」の力を借りる

東京都立桜町高校 進路指導部主任
鳥居純子先生

何事にも「ほどほどが良い」と考えていて、とことん努力して自分を引き上げようとはしていない生徒の意識を変えたいと考えていた頃にカタリバの活動を知りました。一方的に話を聞かせるのではなく、双方向で語り合う形式に興味深く感じたのが導入の決め手でした。

プログラムは、とても緻密につくられていると思います。生徒の実態を詳しく調べて内容を考え抜いているため、生徒の心に訴えかけるものがあります。初回は、生徒が斜に構えて冷めた態度をとるのではないかと心配でしたが、皆が楽しそうに積極的に話す姿を見て、「教師には出来ない関係の持ち方」を実感しました。以来、プログラムの間は教師はあまり口を出さず、キャストの方々にお任せしています。

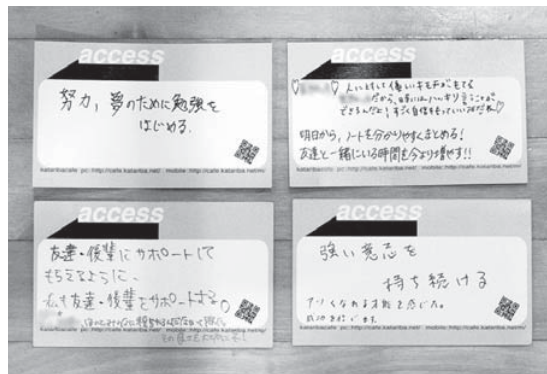
誰もが高校時代に「やりたいこと」を見つけられるとは限りません。しかし、私はそれでよいと思っています。目の前のことを頑張り続けることで、自分の道が見えてくることもあるものです。一生懸命になった経験のある人が一生懸命になることの大切さを教える、そんなカタリバのプログラムを通し、生徒には目の前のことを精一杯頑張ることの大切さに気付いてほしいと思っています。

プログラムを終えると、多くの生徒がまるで魔法にでもかかったかのように前向きな姿勢を見せます。もちろん、そのモチベーションをずっと維持するわけではありませんが、1年後のアンケートでも肯定的な回答を寄せる生徒が大半ですから、やはり大きなプラスになっているのでしょう。今後もカタリバの活動には期待しています。



サンプリングの場面。自分の体験や大学で打ち込んでいることなどを語り掛ける。高校生は、自分自身を考えるきっかけになる

プログラムは、「約束」によって締めくくられる。一人ひとりに渡された「約束カード」(右写真)に、生徒が約束を記入して今後の決意を示し、キャストが背中を一押しするような励ましのコメントを添える。プログラムの終了後も、なかなか会場を去らず、キャストに話し掛ける生徒が多かった。数人の生徒は、キャストが事後ミーティングを行う教室の外まで来て、しばらく話し続けたほどだ。更に話したいことがある生徒は、この後もウェブ上の掲示板でキャストと交流できる仕組みを用意している。



約束カード。グループで話したことや先輩の話聞いて感じたことを振り返り、約束カードに行動目標として書き込む

約9割の生徒が「プログラムに満足」と回答

生徒はどのような感想を抱いたのか。直後に実施したアンケートでは「プログラムに満足」という回答が89%に達した。フリーアンサーでは、「考えが広がり、目標を決められた」「自分に自信を持つことは大切だと思った」「これからの進路が楽しみになった。早く大学生になりたい」「いろいろな人の気持ち分かるようになる、という『約束』をした」などの声が寄せられ、進路、人生観、人間関係など、さまざまな面で良い影響を受けていることが分かる。同校では、今年、カタリ場の実施から1年後にもアンケートを行ってみた。それによれば、現3年生の生徒の88%が、プログラムに対してプログラムの印象を持っていると答えている。「はつきりと決まっていなかった進路を決められた」「いろいろな人の話が聞けて、自分はどうすべきかを考えられた」「大学生活が具体的にイメージできた」など、生徒たちの印象はさまざまだが、自分を見

つめ直し、将来を考えるきっかけになっているようだ。

一方、ボランティアであるキャストにとっても、何が活動のモチベーションになっているのだろうか。誰に聞いても返ってくる答えは、「生徒の変化を見られること」だった。あるキャストは言う。

「女子生徒から『受験勉強をしたけれど、周りの友だちはしていないので迷っている』と相談されたんです。『自分の気持ちを大切にしてい

頑張ったら、翌年、カタリバの掲示板で志望大に受かったと報告がありました。自分と話したことが良い結果につながったことが本当にうれしく、やりがいを感じました」

価値観の多様化が進むなか、生徒に志を高く抱かせるためには、「カタリ場」のように教師や保護者とは異なる「大人」との交流の場をつくることも、一つの解決策になるのではないだろうか。

先生方との強い連携があっはじめて成功する

NPO法人カタリバ 共同創設者
竹野優花氏



私は大学時代に、多くの人との出会いによって自分の世界がどんどん広がっていく経験をしました。そんな出会いが高校時代にあれば、もっと早くから自分自身や社会、将来について深く考えられたかもしれない。そのような気持ちでカタリバを立ち上げました。

カタリバのキャストには、コミュニケーションが得意な人も苦手な人もいます。いわば「普通」の人の集まりです。そんなキャストが、なぜ初対面の生徒の心を開けるのか。生徒の感想に多いのが、「先輩が自分に対して必死に向き合おうとしてくれたのがうれしかった」といった言葉。必ずしも高いコミュニケーション能力が必要なわけではなく、キャストの本気がかかわろうとする意思が伝わったときに生徒は心を開いてくれるのです。

カタリ場のプログラムは2時間ですが、高校生活は3年間です。その場限りではなく、いかに高校生活全体に影響を及ぼせるプログラムに出来るかという視点を大切にしています。そのためには、先生方との強い連携が欠かせません。

カタリバを始めてから、生徒の将来に対する先生方の強い思いを実感しています。ある進学校から、受験を終えた3年生を対象とする依頼がありました。「進学先は決まったが、社会で強く生きていくためのハングリーさを身に付けさせて大学に送り出したい」という先生の言葉に感動しました。これからも先生方との連携を強め、プログラムの質を高めて、高校生に「きっかけ」をつくり続けていきます。